

## 部屋を飾った唾壺

長岡宮西方官衙地区の調査で、木箱に入れられていた球形の体部に漏斗状に広がる口縁部が付く器形の土器が出土しました。『中国陶磁史』によると、頸が細く締め口縁端部が盤状に立ち上がる細頸壺の小型のものを「唾壺」と呼んでます。中国では、この唾壺が貞観13(639)年の墓碑と共に出土しており、唾壺の器形は唐代初期には出現していたことがわかります。日本では、都城・地方官衙・寺院関連の遺跡から出土するものがほとんどで、集落跡から少数例、古墓からの出土は1例ある程度です。日本最古の唾壺出土は長岡宮跡からのもので、平安時代に出土資料が集中し、それ以降の唾壺の出土例は知られていません。

文献に見える唾壺の資料である『類聚雑要抄』<sup>るいじゅうざつようしやう</sup>には、調度品として「母屋簾卷上。中略 屏風前立二階一脚 上屑置唾壺、泔杯等中略」とあります。京都御所・清涼殿朝餉<sup>あさけ</sup>の間の二階厨子棚には、『類聚雑要抄』記載の「銀唾壺」を基にしたと思われる銀製品の唾壺が見られます。正倉院にはガラス製唾壺があります。

唾壺が当時の日本でどのように使用されていたかはよくわかっていません。乾燥した大陸性気候の中国と異なり、湿潤な日本では咽喉が乾くことが少なく、仮に「つばはき」ををするとしても公家・武家社会においては、礼節として懐紙などに包み込んだでしょう。

唾壺の名のように「つばはき」として使用されたのではなく、文献資料に見えるように調度品として定着したのでしょう。(石尾政信)



長岡宮西方官衙の唾壺